

首里城正殿 向拝奥の彫刻物「牡丹に獅子・唐草」 復元についての研究 -前編-

上原 一明*・波多野 泉**・長尾 恵那***

A Study of Restoration of the Shuri Castle Main Hall's Inner Carvings
“Peony and Lion, Arabesque” Part I

UEHARA Kazuaki*, HATANO Izumi**, NAGAO Ena***

(Received September 26, 2025)

平成4年の首里城復元は、第二次世界大戦末期の昭和20年の沖縄戦によって焼失して以来の復興事業であり、様々な歴史資料や文献を基に復元された。不幸にも令和元年10月31日に首里城正殿は焼失してしまったが、直ちに復興事業が開始された。令和の復元は、平成の復元以降に進められた資料研究や古写真の画像分析等から得られた新たな知見を基に多くの箇所に変更が加えられ、より往時に近いものとなるよう平成復元に比べ監修体制の充実が図られた。本論文の「向拝奥の彫刻物牡丹に獅子・唐草」に関しても、フランス海軍古写真（ルヴェルテガ少尉撮影）の発見により平成復元時とは大きく異なる意匠となり、下絵作製と木彫刻製作は監修体制の下、多くの検証を経て進められた。本論文は前編として復元の経緯と下絵作製の概要について、後編として木彫刻の製作に至る課題や問題解決を中心に考察し、この彫刻物の往時の姿を明らかにする。

はじめに

本論文は、首里城正殿「向拝奥の彫刻物 牡丹に獅子・唐草」の令和の復元における下絵作製及び木彫刻製作について論述する。前編では、首里城復元の経緯と首里城復興基金事業、監修及び製作体制の概要、「向拝奥の彫刻物 牡丹に獅子・唐草」の復元にあたり平成復元以降に発見された資料の検討から得られた新たな知見を基に、全く新しい意匠に決定した根拠と下絵作製の工程を述べる。そして後編では、木彫刻製作に関する工程と検証や問題点を取り上げながら、往時の造形を考察し、この彫刻物の往時の姿を明らかにすることを目的とする。

1-1. 首里城復元の経緯

第二次世界大戦末期の昭和20年の沖縄戦によって灰燼に帰した首里城跡には、戦後の昭和25年に琉球大学が開学し昭和54年から順次移転を進め昭和59年に移転が完了するまでの間に、首里城復元の機運が高まる中、昭和33年には守礼門が再建され、昭和45年に琉球政府文化財保

護委員会（首里城復元期成会の前身）が首里城復元計画を策定し、日本政府へ正式に首里城及びその周辺の戦災文化財の復元を要請する。昭和47年の沖縄県の日本復帰後、翌48年には首里城復元期成会が発足した。そして、昭和61年に国営沖縄記念公園首里城地区として、首里城跡約4haの復元整備が閣議決定され、平成元年11月に正殿復元工事が着工し、沖縄本土復帰20周年にあたる平成4年11月に戦後47年を経て正殿、北殿、南殿・番所、瑞泉門、広福門、奉神門などの復元完成により一部開園された。

その後も復元整備が進められ、平成31年2月に御内原、東のアザナエリアの整備完了により首里城公園が全面開園したが、同年（令和元年）10月31日未明に正殿内部から発生した火災により正殿など主要9棟が焼失又は焼損した。政府は、火災後速やかに関係閣僚会議を立ち上げ、同年12月11日付けで「首里城復元のための関係閣僚会議」決定による「首里城復元に向けた基本的な方針」が策定された。ここでは、前回（平成）復元時の基本的な

* 山口大学教育学部, 〒753-8511 山口市吉田1677-1, uehara@yamaguchi-u.ac.jp

** 沖縄県立芸術大学長, 〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4, hatano@okigei.ac.jp

*** 沖縄県立芸術大学美術工芸学部, 〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4, nagao@okigei.ac.jp

考え方を踏襲すること、すなわち、正殿については1712年に再建され1925年に旧国宝指定されたものに復元することを原則とし、その上で、前回復元後に確認された資料や材料調達状況の変化等を反映させること、前回の復元計画にできる限り沿って復元できるよう、政府一丸となって資材調達に取り組むとともに、前回復元時から沖縄県内に蓄積、継承されている伝統技術を活用するための支援を行うことなどが謳われ、令和元年度内を目途に首里城正殿の復元に向けた工程表の策定を目指すことを明記している。その後、内閣府沖縄総合事務局に令和元年12月27日付で「首里城復元に向けた技術検討委員会」（以下「技術検討委員会」という。）が設置され、焼失後わずか2ヶ月足らずで復興事業が開始されたのである。

1-2. 首里城復興基金事業の概要

火災直後から首里城の早期復興の願いと共に国外を含めた県内外から多くの寄附金が寄せられ、沖縄県はその受け皿として令和2年3月16日付で「沖縄県首里城復興基金」を設置し、その有効活用を図るため、令和2年7月30日付で沖縄県知事裁決により「沖縄県首里城復興基金の活用に関する方針」を定めた。そこでは、首里城火災からの復興の範囲内において活用するという基本原則に基づき、焼失した首里城城郭内の施設の復元に関し主として、1) 正殿の木材調達、2) 正殿の赤瓦調達、3) 大龍柱等の石彫刻、唐破風妻飾等の木彫刻及び龍頭棟飾等の焼物など、屋外彫刻の復元、4) 扁額などの室内装飾の復元、5) 首里城正殿、北殿及び南殿等の復元に関する各事業のうち、国との協議、調整が整った事業に充当することが定められている。加えて、事業の実施にあたっては、国の「首里城復元に向けた基本的な方針」に沿って、沖縄県内に蓄積、継承されている伝統技術を積極的に活用することとされている。

1-3. 監修体制及び製作体制

「沖縄県首里城復興基金の活用に関する方針」に基づき、首里城正殿の復元工程に合わせて、国の技術検討委員会から提供された仕様をもとに円滑に製作できるよう、沖縄県土木建築部首里城復興課に令和4年7月26日付で首里城復興基金事業監修会議（以下「監修会議」という。）が設置され、琉球史・漆工史・文化史各分野の歴史専門委員3名（令和6年度より2名）と彫刻・焼物・染織・瓦類各分野の芸術専門委員4名で構成された。また、本事業の各分野の監修に係る詳細事項について検討するため、監修会議の下にワーキング部会（以下「WG部会」という。）が設置された。なお、本稿筆者である波多野は、監修会議並びに彫刻WG部会及び焼物WG部

会の委員に委嘱されている。

また、令和の復元においては県内の伝統技術の継承と人材育成の観点から、琉球王国時代の復元製作の経験のある熟練技術者と組んで、今後数年かかる製作に携わることができる若手の技術者の積極的な登用を図るとともに、可能な限り沖縄県にゆかりのある技術者を中心とした製作体制づくりを目指すこととされた。

具体的な製作技術者の選定は、選定にあたっての基本的な考え方に沿って各WG部会に委ねられ、監修委員等の推薦により製作体制案が提示され監修会議において決定されている。正殿「向拝奥の彫刻物 牡丹に獅子・唐草」の復元製作については、波多野の推薦により下絵作製を沖縄県立芸術大学の長尾恵那氏、木彫刻製作を山口大学の上原一明氏とすることが、彫刻WG部会及び監修会議において承認されている。

1-4. 新たな知見

正殿向拝奥中央彫刻部分の意匠について、平成の復元では「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」（以下「寸法記」という。）（図1・2）や「百浦添御普請絵図帳」（以下「御普請絵図帳」という。）（図3・4）、「首里城正殿前城元設営絵図」（図5・6）の向拝奥の概略図を基に検討され、図柄は「中央に1輪の牡丹と左右に唐草文」を配置する「牡丹に唐草」仕様とされていた（図7）。

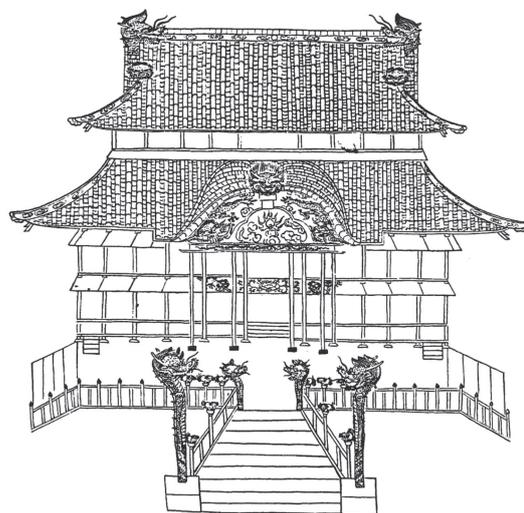


図1 百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記 1768年
（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵）

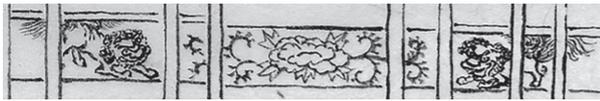


図2 百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記 部分 (向拝奥 牡丹に唐草)

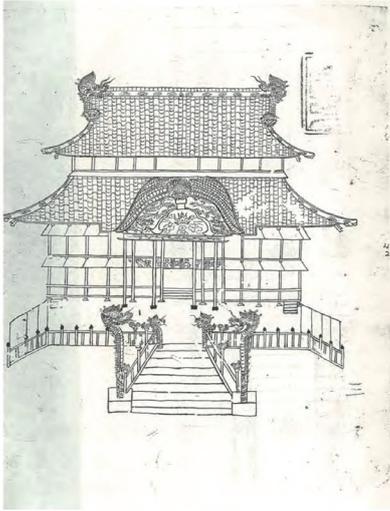


図3 百浦添御殿普請絵図帳 1846年 (那覇市歴史博物館蔵)

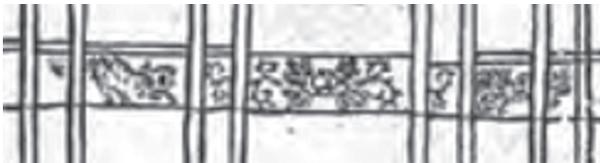


図4 百浦添御殿普請絵図帳 部分 (向拝奥 牡丹に唐草)

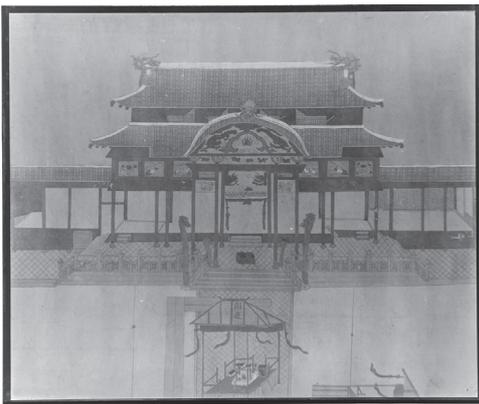


図5 首里城 正殿前城元設営絵図 (部分) (原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、沖芸大・東文研共同研究2024)

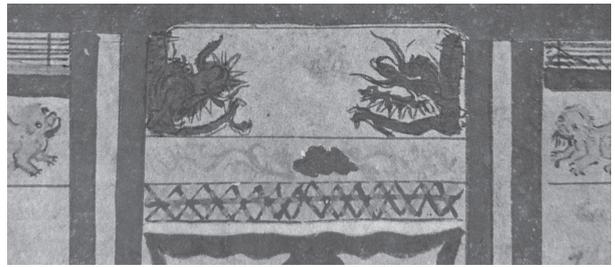


図6 首里城 正殿前城元設営絵図 (部分) 部分 (向拝奥)



図7 平成の復元 正殿 (牡丹に唐草) (首里城デジタルミュージアム)

一方、令和の復元では、国の技術検討委員会において、同彩色・彫刻ワーキンググループ会議及び同作業チームによる、新たに発見されたルヴェルテガ少尉撮影フランス海軍古写真 (以下「仏海軍古写真」という。) (図8) の向拝奥中央彫刻部分 (図9) の画像分析がなされ、「3輪の牡丹と唐草、一対の獅子」の可能性が高いとする新たな知見が示された。その知見を反映させた復元イメージ案 (図10) による「牡丹に獅子・唐草」仕様を前提に、図柄の詳細については県の監修会議での検討に委ねることとされた。それを受け、県の監修会議彫刻WG部会では、仕様に沿って新たに下絵を検討、作製することとした。国提供の仕様概要と県の対応は、表1の通りである。



図8 フランス海軍古写真 Temple dans la cour du palais de l'Ô-Sama. 王様の神殿 (首里城正殿) 1877年 (原版所蔵者: Hervé Bernard, France) 沖縄県公文書館提供



図9 Temple dans la cour du palais de l'Ô-Sama. 部分



図10 新たな知見を反映させた復元イメージ案
(国の技術検討委員会、沖縄総合事務局)

表1 国提供の仕様概要と県の対応

【寸法】	地板：長さ3,627×縦499 mm 彫刻：長さ 約3,550×縦 約490×厚 61 mm
【材料】	国産ヒノキ
(1) 平成復元を踏襲する事項・しない事項	<ul style="list-style-type: none"> ・踏襲する：彫刻全体の寸法は平成復元を踏襲する。 ・踏襲しない：彫刻の図柄は平成復元を踏襲せず、(2)による。
→県の対応	全体の寸法は平成復元を踏襲する。
(2) 新たな知見等に基づき修正が必要な事項	<ul style="list-style-type: none"> ・牡丹に唐草の文様について 仏海軍古写真等の分析の結果、「3輪の牡丹と唐草、一對の獅子」の可能性がある。なお、写真が不鮮明で明確にできないため、文様の詳細については国の検討において作製したイメージ案なども参考に、製作の過程で県において検討願いたい。 ・下絵等について 新たな知見に基づき、新規に作製する必要がある。
→県の対応	図柄は、「3輪の牡丹と唐草、一對の獅子」とし、新たに下絵を作製する。詳細については監修会議彫刻WG部会で検討・決定する。

正殿向拝周りの透欄間の意匠については、正面3枚、側面南北各1枚の計5枚表裏10面全てが「牡丹唐草、獅子」の図柄であり、向拝柱の金龍五色之雲一對、向拝奥左右降り金龍一對、同じく阿吽一對の獅子と相まって、高貴な吉祥意匠で国王の権威と琉球國の繁栄を国内外に表す向拝空間の統一性を考えるとき、向拝奥中央小壁の彫刻物も同様の意匠であったと考えるのが妥当であろう。加えて、仏海軍古写真の発見により明らかになった、こ

の小壁全面をほぼ左右対称に埋め尽くす画像痕の存在が、不鮮明とはいえ、向拝透欄間とくに正面中央の「牡丹唐草、獅子」(図11・12)とほぼ同様の図柄であったとする論を導く根拠となっている。



図11 首里城正殿 正面 (原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、沖芸大・東文研共同研究2024)



図12 首里城正殿 正面 部分
(向拝透欄間中央 牡丹唐草、獅子)

2. 下絵作製の工程

本章では、「向拝奥の彫刻物 牡丹に獅子・唐草」の復元に際して実施した下絵作製の工程について、仏海軍古写真の分析やデジタル作画の方法を解説する。さらに、各意匠を対象として、必要に応じて平成の復元(以下「平成復元」と言う。)との比較や、仏海軍古写真及び鎌倉芳太郎による写真資料の新たな分析に基づいて変更した点についても詳述する。

なお、本章においては、沖縄県立芸術大学と東京文化財研究所の共同研究にて高精細デジタル画像となった鎌倉芳太郎氏撮影による写真を「鎌倉写真」と呼称する。

2-1. 古写真の分析と活用

下絵作製にあたっては、主要な資料である仏海軍古写真を起点として画像分析を行った。この仏海軍古写真はモノクロであるため、彫刻物の意匠を把握するには白黒の濃淡に依拠せざるを得ない。本節では、技術検討委員会による新たな知見の根拠となった仏海軍古写真をどのように読み解き、下絵作製に活用したのか、その方法と過程について述べる。

2-1-1. 仏海軍古写真の読み取り方法

1.4.でも触れた新たな知見では、写真中央に位置する牡丹の左右に確認できる黒い影を、それぞれ阿形・吽形の獅子として解釈している。また、これらの獅子の外側に見られる白い余白については、左右に配された牡丹である可能性が指摘されている。すなわち、写真における白黒の濃淡を手がかりとして、構成要素の存在や配置を読み解く分析手法が採用されている。

本工程においても、仏海軍古写真の解釈にあたっては当該知見を踏襲し、特に黒いもやのように見える部分については、経年劣化による地板の変色ではなく、意図的に描かれた図像であるとみなして、下絵作製を進めた。

2-1-2. 仏海軍古写真の加工方法

下絵作製の第一工程として、仏海軍古写真(図9)に対してAdobe Photoshopの「遠近法ワープ」機能を用い、写真に生じていた歪みを補正した。さらに、設計図に準拠した寸法に収めるため、高さとの拡大・縮小を行った。その後、柱に隠れて視認できない右側については、左側画像をミラーリング加工して右側に合成した。

以上の加工を施した仏海軍古写真をもとに、牡丹・獅子・唐草の位置や大きさを検討し、構図の基盤とした。

2-2. 下絵作製の方法

下絵の作製には、iPad及びApple Pencilを用い、CLIP STUDIO PAINTアプリケーション上で全工程をデジタルにて実施した。アナログ画材は一切使用していない。

対象彫刻はおおよそ左右対称であることから、ミラーリング機能やコピー&ペーストを活用することで構図の適切性を迅速に確認できた。また、牡丹や獅子といったモチーフごとにレイヤーを分けて作画することで、各要素のサイズ調整や配置の試行錯誤を容易に行うことが可能となり、監修会議での指摘にも即座に対応できた。さらに、高解像度で描画したデータは、実寸大での出力にも対応可能であり、監修会議等では大型プリンタを用いて実寸確認を行った。

これらのデジタルツールの活用により、作業効率は大幅に向上したものの、慎重な検討を重ねた結果、下絵完成までには2023年7月から2024年3月に及ぶ約9か月を要した。

2-3-1. 唐草の構成と描写

2-3-1-1. 唐草の構成

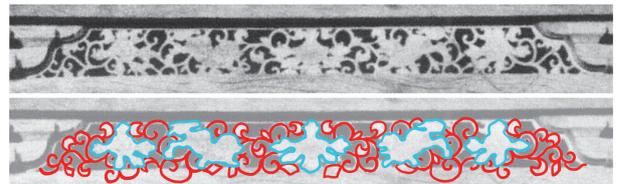
平成復元における唐草(図7)は、主軸から枝分かれする構成が特徴的であり、これは崇元寺本堂欄間の雲鶴図(図13)や「首里城正殿前城元設営絵図」(図6)に見られる唐草の意匠と共通している。また、構造的に先

端に向かって唐草の密度が減少する傾向があり、余白を活かした表現がなされていることが窺える。



図13 崇元寺 本堂 欄間雲鶴図 部分(鎌倉写真、
原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、
沖芸大・東文研共同研究2024)

一方、仏海軍古写真(図9)では、枠の隅に至るまで黒いもやが確認されることから、より高い密度で構成された唐草が表現されていた可能性が高いと判断した。そのため、本工程では透欄間に見られる唐草意匠(図14)を踏襲する方針とした。透欄間の唐草は網目のように均等な密度があり、枠外にはみ出して展開される点が特徴的であるため、本工程ではそれらを繋ぎ合わせ、主軸を感じさせない構成に再編した。これにより、枠内に収まり且つ高密度な構成が実現された(図15)。さらに、仏海軍古写真中の黒いもやは葉の痕跡として読み取り、その位置に応じて葉を配置した。



上: 図14 田辺泰『琉球建築』(座右宝刊行会、
1972年)「19 首里城 正殿玄関」(部分)

下: 図15 図14を基に枠外の唐草を繋ぎ合わせた案

なお、彫刻技法に着目すると、往時の透欄間は枠と一体で彫られているが、向拝奥の彫刻物については平成復元と同様に、令和の復元でも別体彫刻を地板に貼り付ける手法が用いられている。したがって、往時も同様の構造が採用されていたと仮定した場合、枠縁際に至るまで展開される意匠を敢えて別体で彫刻した意図については、今後さらなる検討の余地があるといえる。

2-3-1-2. 唐草の葉脈の描写

鎌倉写真に見られる透欄間では、牡丹の葉脈は陰刻で表現されている一方、唐草には葉脈を思わせる筋が陽刻されていることが確認できる(図21)。唐草文様の事例について各種資料を調査した際、御後絵(おごえ)(図16)や、琉球漆器に描かれた唐草文様に見られる葉の一部には、葉の裏面を側面視で捉えたと解釈できる描写が認められた(図17・18)。

以上のことを踏まえると、葉の表面の葉脈を陰刻で表現している透欄間の牡丹に対し、唐草は葉の裏面を捉え、それゆえ葉脈が陽刻で表されている可能性が高いと推測

される。

さらに、鎌倉写真に見られる唐草では、葉脈は各裂片に1本ずつ対応して描かれているのではなく、葉脈の根元が大凡等間隔に配置される構成が優先されていると判断された。この観察結果に基づき、本工程においても同様の構成を採用した（図19）。

また、葉脈の本数については、鎌倉写真に見られる透欄間を根拠として、一葉あたり3本から4本程度に統一した。



図16 初代尚円王御後絵 部分（鎌倉写真、原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、沖芸大・東文研共同研究2024）



図17 潤漆獅子牡丹沈金六角東道盆（浦添市美術館所蔵）



図18 潤漆獅子牡丹沈金六角東道盆 部分（浦添市美術館所蔵）

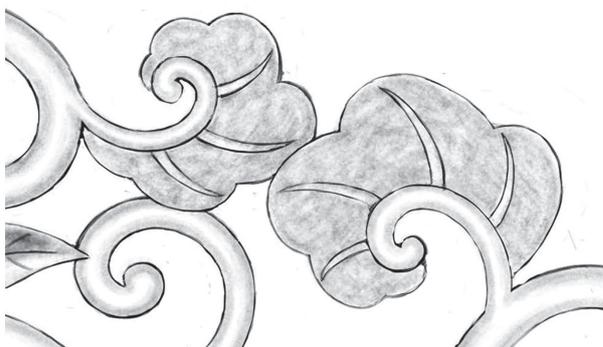


図19 本工程にて作製した下絵の一部（唐草の葉脈）（全体図は後編の図61）

2-3-1-3. 唐草の蔓の描写

透欄間における唐草の蔓について、葉の付いた蔓と無い蔓と比較すると、葉の付いた蔓の方がやや細く描かれていることが確認できるため、本工程でもこれに倣うこととした。蔓の先端についても、おそらく構造的な強度を考慮して、葉から長くは突出せず、控えめに処理されている。その巻き具合も、半周に満たない程度で止めることとした。

また、蔓の太さや先端の球体の大きさには明確な統一性が見られないことから、この点についても鎌倉写真を参照しつつ柔軟に調整を行った。さらに、木彫刻として起こすに際し構造的強度を確保するため、宙に浮くような部分は極力避け、必ず他の箇所と接点を持たせる構成とした。

2-3-2. 獅子の姿勢

新たな知見において獅子と判断された仏海軍古写真に写る黒い図像は、やや縦長に収まっており、尻を持ち上げた姿勢の獅子として読み取ることができる（図20）。このことから、当初は鎌倉写真に見られる透欄間側面に彫られた獅子の意匠（図21）を採用した。しかし、向拝

奥の彫刻物は正殿の正面に設置されるため、透欄間側面の獅子を配することは相応しくないと判断し、透欄間正面の獅子(図22)を参照し、若干の調整を加えた上で下絵に採用した(図23)。

すなわち、これらの経緯は仏海軍古写真を重要な手がかりとしつつも、それに忠実であることを最優先としたわけではなく、彫刻の設置環境や鑑賞視点、図案としての妥当性を踏まえたうえで、構成の判断を行ったものである。



図20 Temple dans la cour du palais de l'Ô-Sama. 部分



図21 首里城 正殿正面唐破風欄間透彫 部分(鎌倉写真、原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、沖芸大・東文研共同研究2024)



図22 首里城 正殿正面 唐破風 部分(鎌倉写真、原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、沖芸大・東文研共同研究2024)



図23 本工程にて作製した下絵の一部(獅子)(全体図は後編の図61)

2-3-3. 牡丹の表現

2-3-3-1. 花の角度

牡丹の花の描写に関しては、琉球の漆芸品(図24・25)や円覚寺の羽目板(図26)に見られる側面視点の表現も検討したが、透欄間との意匠上の整合性を重視し、透欄間に見られる正面視の牡丹を踏襲することとした。



図24 朱漆牡丹唐草堆錦鞍(浦添市美術館所蔵)



図25 朱漆牡丹唐草堆錦鞍 部分(浦添市美術館所蔵)



図26 牡丹彫刻仏間羽目 部分(沖縄県立博物館・美術館所蔵)

2-3-3-2. 葉の構成

透欄間における牡丹の葉は、中央・左右ともに十字状に配置されているが、向拝奥中央の牡丹については斜め十字構成を採用した。これには以下の二点の根拠がある。

第一に、「寸法記」（図27）及び「御普請絵図帳」（図28）において、中央の牡丹の葉が斜め十字状に描かれている点である。



図27 百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記 部分
(鎌倉芳太郎資料、1768年、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)



図28 百浦添御普請絵図帳 部分
(1846年、那覇市歴史博物館所蔵・提供)

第二に、仏海軍古写真（図9）に見る中央の牡丹と獅子との距離が極めて近く、左右方向に葉を展開することが構成上困難な点である。

以上の理由から斜め十字構成を採用しつつ、下部の葉については鎌倉資料（図29）及び「国宝建造物沖縄神社拝殿 向拝欄間詳細図」（以下「拝殿図」と言う。）（図30）を参考に、垂直方向に配置する構成を併用した。なお、葉の裂は実際の牡丹の形状に倣い、一葉三裂とすることとした（図31・32）。

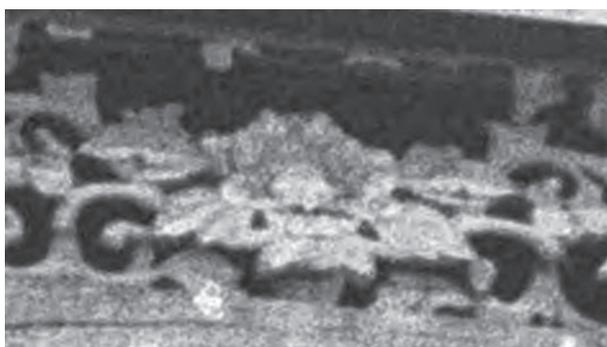


図29 首里城正殿正面 部分（鎌倉写真、原板/沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵、
沖芸大・東文研共同研究2024）



図30 国宝建造物沖縄神社拝殿 向拝欄間詳細図
部分（国（文化庁）保管、奈良文化財研究所提供）



左: 図31 本工程にて作製した下絵の一部（左側の牡丹）
右: 図32 本工程にて作製した下絵の一部（中央の牡丹）
(全体図は後編の図61)

2-3-3-3. 牡丹の花弁の描写

鎌倉写真に見られる透欄間（図29）や拝殿図（図30）では、中央に位置する牡丹の下部花弁が一弁四裂で描かれているようにも見える。しかし、透欄間の側面を捉えた鎌倉写真（図21）や平成復元の下絵では、一弁三裂に統一されていることが確認できる。このため、本工程においてもその方針に従い、一弁三裂を採用した。

一方で、表現の硬直化を避けるため、一部の花弁には重なりを描き込み、下絵に柔らかさと奥行きを持たせる工夫を施した。また、各花弁の倒卵形における長さや太さについても画一化を避け、自然な変化を加えることで、写実性と意匠性の両立を図った。

まとめ

以上前編では、首里城正殿向拝奥の彫刻物「牡丹に獅子・唐草」復元における首里城復元の経緯から首里城復興基金事業の概要、監修体制及び製作体制と新たな知見についての詳細を述べた。そして、下絵作製の工程として、古写真の分析と活用や仏海軍古写真の読み取り方法、仏海軍古写真の加工方法を経て、下絵作製の方法へと展開した。その中で唐草の構成と葉脈の描写、唐草の蔓の描写、獅子の姿勢、牡丹の表現、花の角度、葉の構成、そして牡丹の花弁の描写に関する調査と作製の方法を述べた。後編では、この下絵を基に立体的に起こす工程と檜による本彫りについて述べる。